

昨

夏、数年ぶりにベルリンの街を訪れた。東西ドイツの統一からすでに四半世紀が経っている。都市再開発のプロジェクトもひと段落した感があつたが、注目すべき建築がまた新たに姿を現していた。なかでも、歴史的建造物の改修プロジェクトにユニークな作品がみられた。

世界遺産にも指定されている博物館島の中心、旧王宮の復元工事がなんと進行中で、シンボルとなるドーム屋根の鉄骨がちょうど組み上がったところだった。第二次世界大戦後に東ベルリンに編入され解体されてしまった建物である。七〇年の歳月を経て、イタリアの建築家F・ステラの設計によりフンボルト・フォーラム（民族学博物館）として再建され、博物館島の中核的施設として活用されていくことになる。

旧王宮の向かい、広場をはさんだアルテスマuseum（旧博物館）の横を抜けると、ノイエスマuseum（新博物館）が見えてくる。この建物も戦争で大きく破壊され長らく閉鎖されたままだったが、イギリスの建築家D・チップパーフィールドが抑制されたデザインでその空間を再生させた。残された部材を活かしかつての間を継承しつつも、静謐な詩情のようなものがただよう、現代的な新たな魅力がつけ加えられているのが印象的だ。

また、旧王宮から通り沿いに五分も歩くと、国立図書館の建物の前に着く。二十世紀初頭に建設された新古典主義の建物だが、ここにドイ

各 人 各 説

ベルリンに想う

——歴史的建造物の「価値」から「魅力」へ

日本大学理工学部建築学科 教授

田所辰之助

Shinnosuke Tadokoro



ツの建築家H・G・メルツ設計による新閲覧室が増築され、見応えがあつた。三六坪の吹抜けをもつガラスの巨大なボックスが中庭に挿入されている。息を呑むような大空間に書物が並ぶさまは圧巻で、ヨーロッパの図書館建築の伝統が現代に活かされている様子を見ることができる。

これらの改修事例は、復元（再建）、改修、増築とそれぞれ異なるが、建築家による大胆な発想により新たな空間的魅力が生み出されているところが共通している。いずれも、歴史的文化的財の「保存」という従来の考え方ではもはやとらえることはできないだろう。ヴェニス憲章で唱えられた「オーセンティシティ（真正性）」の考え方は、当初の材料やデザインのままでの保存を前提にするが、この三つの事例はその条件に抵触している。むしろ、歴史的建造物を対象にした、現代建築デザインの新たな動向と見るほうが妥当なのかもしれない。

ひるがえって東京でも、丸の内周辺の都市再開発などで近年は同根の問題が取り沙汰されてきた。だが、その過程でいわゆる「腰巻き保存」と言われるような手法が定着してしまった感がある。歴史的文化的財としての「価値」を議論するだけでなく、そこにリビング・ヘリテージ（現代に生きる建築遺産）としての建築的な「魅力」をいかに与えていくか。現代の建築家たちに新たな発想とデザイン力がいま求められているように思うのである。